

四旬節第2週 土曜日 3月6日

いつも先に神が動く

朗読から祈りへ

罪人といっしょに

罪人というレッテルを貼られていた徴税人や律法を守れない人々。その人たちと一緒にイエスは食事をする。それを見て、ファリサイ派の人々や律法学者たちは不平を言う。その彼らに向かってイエスはたとえを話される。それが「放蕩息子」のたとえや「いつくしみ深い父」のたとえ「憐れみ深い父」のたとえと呼ばれる話である。このたとえは聖書の中でも最もよく知られているたとえ話の一つといつていい。この話に示されている神の憐れみによつて多くの人が救われる。

葬儀があつた。亡くなった方の近隣の人が参加した。その中に長年、教会に来ていなかった人がいた。その夜、その方から電話があつた。少し酒を飲んでゐる雰囲気は伝わる。喜びにはずんだ声。

「今日はうれしくてたまらずに電話しました。気にならながらも、なかなかミサに来れずにいました。行こう、行こうと思ひながら七年が経つてしまいました。怠け者なんです、わたしは。今日、久しぶりにミサに参加してご聖体をいただきました。こんな罪人がゆるしの秘跡も受けずに聖体拝領をしました。赦してもらへるでしょうか。ミサが終わつて神父さまから声をかけていただき、温かく迎えてもらつてうれしかったです。信者さんからもやさしくしていただいてうれしかったです。次の日曜日は仕事の都合で、どうしてもミサに行きませんが、その次にはかならず行

聖書朗読

今日の
ポイント

ミカは紀元前8世紀後半の預言者ですが、7章8―20節は捕囚時代に書かれた付加です。バビロン捕囚という国家的な危機の中で、過去に現された神の導きを信じて、祈り求めています。

福音は、いわゆる「放蕩息子」のたとえです。生きることができなくなつたとき、息子は父のもとへ帰る決断をし、父は息子が見つかったことを喜んで迎え入れます。人にとって「あるべき場所」である神から離れることが罪であり、神は人が立ち帰るのを今か今かと待っています。

第一
朗読

ミカ7章14―15・18―20節

14 あなたの杖をもつて、御自分の民を牧してください

あなたの嗣業である羊の群れを。

彼らが豊かな牧場の森に、ただひとり守られて住み

遠い昔のように、バシャンとギレアドで

草をはむことができるように。

15 お前がエジプトの地を出たときのように

彼らに驚くべき業をわたしは示す。

きます。その時にゆるしの秘跡をお願いします。やっぱり教会はいいと思います。温かい。これから大切にします。ありがとうございました。」

このようなことを四十分の間、繰り返して繰り返して話した。

神の愛が先

ゆるしの秘跡を受けないで聖体拝領したからといって、この方を責めることができるだろうか。

葬儀ミサが終わってこの方に声をかけた。「どういうご関係ですか。」恥ずかしそうに答えた。「亡くなった方の近所の者で、信者です。神父さま、教会に来てなくてすみません。告解もせずに聖体拝領したのですが、すみません。」しきりにわたしに謝った。長年教会に来ていない人は、かならずといつていいほどわたしに「謝る」「神父様、ごめんなさい。すみません」と。この言葉は何度聞いてもしっくりこない。どうして神父に謝るのだろうか…。どうも、叱られると思っていたり、神父が怒ると思っているようだ。

「よかったですね」とわたしは言った。イエスさまの方から来てくださったんですね、と言った。「とてもうれいすよ」と言った。信徒発見！はうれしい。信徒会長（他にいい呼び方を皆で模索しているがなかなか見つからない）からも温かい言葉をかけられたそうだ。会えてうれしい！と。それで、本人もうれしくなり、夜、電話をかけてきた。一杯ひっかけた。他の信者にも喜びの電話がかかってきたそうだ。このような出来事に遭うと、決まって先のイエスのたとえ話やザアカイとイエスの出会いを思い浮かべる。

いつも先に神の愛がある。いつも先に神が動く。そして、人は神の愛を知る。知った人は生き方が変わる。その逆ではないということは何度も経験してきた。正しく生きていくから、神に愛されるのではない。正しく、清く生きていくから神の子ではない。もともと、すべての人は神の子、父の子である。それが福音。

時として人は自分が罪深いことに気づく。人は神から離れるときに罪

18 あなたのような神がほかにあろうか
咎を除き、罪を赦される神が。

神は御自分の嗣業の民の残りの者に

いつまでも怒りを保たれることはない

神は慈しみを喜ばれるゆえに。

19 主は再び我らを憐れみ

我らの咎を抑え、すべての罪を海の深みに投げ込まれる。

20 どうか、ヤコブにまことを

アブラハムに慈しみを示してください

その昔、我らの父祖にお誓いになったように。

福音

ルカ15章1―3・11―32節

1 徴税人や罪人が皆、話を聞くとうとしてイエスに近寄って来た。

2 すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。

3 そこで、イエスは次のたとえを話された。

11 また、イエスは言われた。「ある人に息子二人いた。12 弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。13 何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった。14 何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。15 それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話させた。16 彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。17 そこで、彼は我に返って言った。『父のところ

を犯すのではないだろうか。神から離れることが罪の原点であり、罪の原因でもあると思う。このたとえの息子(弟)は父から遠く離れていく。その「地方」で悩み、苦しみ、打ちひしがれる。そして父である神のもとに戻ろうと決意する。それでも、いざとなると引いてしまう。最後の一步が踏み出せない。そのとき、神の方から歩み寄ってくださる。そのままを受け止め、抱きとめてくださる。それが福音。

兄は信じることができない

このたとえ話を読んで「兄がかわいそうだ」という人がいる。父のものを離れずに、まじめに？ 父と一緒にいるのに、父親からそのことは評価されずに説教までされている、と。兄は父親の「ところ」を理解することができなかった。放蕩三昧に生きて、ぼろぼろになつて戻ってきた弟を、なぜこの父親は責めることもなく受け止めるのか。父親にとつて喜ぶことが当たり前のことも、兄にとつては理解不可能なことだった。

このたとえ話は四旬節によく読まれる。黙想会や回心式のテキストとして使われる。多くの場合、説く者も、聴く者も弟に焦点を当て、「罪深い生活」をして来なかつたかどうかと、反省の材料やきっかけとして使われる。そして「皆さん、神のもとに立ち返りましょう」と結ぶ。この話を聞いた者は、過ぎし日の生活の見直しをし、罪を数えあげ、それを告白して赦しを求める。いづくし深い神に信頼と感謝のこころを持つて…。

この話の教えることは次のようなことではないか。わたしたちは弟よりも兄の態度を見ることによつて罪の糾明ができるのではないだろうか。はたして、わたしたちはすべて罪人。それゆえに神に受け入れられ、受け止められている。そこに神の愛を見る。そのゆえに救われている。まず、そこに目を留め、そして、赦された者として、神に受け入れられた者として、人を受け止め、受け入れる。

もつともよく知られているイエスのたとえ話。まだまだその真意は掴みきつていない。教会が赦された者の集いとして存在するなら、まさに、そこは「救いの場」となるのではないかと思う。

(M・M・Y)

は、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。18 こをたち、父のところに行つて言おう。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。19 もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください』と。20 そして、彼はそこをたち、父親のもとに行つた。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄つて首を抱き、接吻した。21 息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』22 しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいばん良い服を持つて来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。23 それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。24 この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなつていたのに見つかったからだ。』そして祝宴を始めた。

25 ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。26 そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。27 僕は言った。『弟さんが帰つて来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』28 兄は怒つて家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。29 しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかつたではありませんか。30 ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰つて来ると、肥えた子牛を屠つておやりになる。』31 すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。32 だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返つた。いなくなつていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』